

# 富士のさと 防災・減災教育キャンプ

令和7年12月6日(土)～12月7日(日) 1泊2日



## 1.目的

「もしも災害が起こったら」を想定し、不自由な環境下で自ら考え、工夫して生活をするを通して、自助・共助の重要性を感じ、実践する機会を提供する。また、災害を自分事として捉え、広い視野で防災・減災を考えることのできる人材の育成を目指す。

## 2.参加者

22人(募集20人、応募30人)

内小学4年生12人、小学5年生5人、小学6年生5人

## 3.協力

陸上自衛隊滝ヶ原駐屯地(防災活動や災害救助に関する講師及び炊き出しの提供)

日本DMC株式会社(ドローン体験及びドローンの災害時の活用に関する講師)

## 4.協賛

能美防災株式会社(防災物品及び防災カードゲームの提供)

## 5.事業内容

	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
12月6日(土)					受付	開会式	アイスブレイク	昼食	自衛隊講話 シチュエーションゲーム	準備タイム			もしもタイム ～もしも災害が起こったら～				就寝
12月7日(日)	6:30 起床	もしもタイム ～もしも災害が起こったら～	片付け		災害ビースト バトルアタック	炊き出し 体験		ドローン体験	振り返り	閉会式							

### 【事業1日目】12月6日(土)

#### (1) アイスブレイク

参加者・自衛隊員・スタッフが打ち解け、場の雰囲気や和らげることを目的として、スタッフ主導でアイスブレイクを実施した。はじめに対話を中心としたコミュニケーション活動を行い、その後、身体的接触を含むレクリエーションや、防災要素を取り入れたグループ活動を実施した。参加者同士が意見を出し合いながら取り組むことで、徐々に関係性を深めていく様子が見られた。

活動が進むにつれて笑い声が増え、その後の昼食時や休憩時には参加者と自衛隊員が談笑し、遊びを自発に行う姿が見られた。この様子から、アイスブレイクを通して参加者・自衛隊員・スタッフ間の心理的距離が縮まり、良好な関係性が形成されたことがうかがえる。

#### (2) 自衛隊講話 (講師：陸上自衛隊滝ヶ原駐屯地 広報班長 堀様)

「自助」「共助」「公助」といった災害時の基本的な考え方から、自衛隊が担う救助活動について、画像や映像を用いてご講義いただいた。講義は対話形式で進められ、参加者は双方向のコミュニケーションワークにより、主体的に考える姿勢が多く見られた。特に講義後の質疑応答では、多くの参加者が自ら手を挙げて質問する様子が見られ、講義内容を自分ごととして受けとめ、理解を深めたことがうかがえた。

また、その後に実施するシチュエーションゲームや「もしもタイム」につながる視点や問いが講義の中に含まれており、参加者が気づきを得ることができ効果的な導入となっていた。

### (3) シチュエーションゲーム

「もしもタイム」に向けた導入および必要な知識・ヒントの獲得を目的として、「水」「電気」「ダンボール」の三つの観点からレクリエーションを実施した。各レクリエーションには、自衛隊員が2名ずつ同行し、参加者の理解を深める気づきを促すため、ファシリテーターとして関わった。

「水」および「電気」については、災害時になぜ使用できなくなるのかという問いを起点に、事前の備えや災害後の資源の節約・活用方法について、グループごとに話し合いと発表を行った。「水」のレクリエーションでは、自衛隊の背嚢（リュック）を背負う体験を通して、必要な水の量や重さを体感的に学ぶことができた。「電気」では、限られた電力の優先順位を考える中で、電気に頼らない暖の取り方や調理方法などを学んだ。

「ダンボール」では、避難所で使用されるダンボールベッドについて学び、実際に作製体験を行った。簡易な資材であっても生活環境を改善できることを学んだ。

これらの経験は、その後の「もしもタイム」における参加者の行動や判断に活かされていた。一人あたり最低 1L の水を確保する意識の共有や、懐中電灯やエマージェンシーシートの活用、ダンボールを用いた寝床づくりなどの実践につながっていた。

### (4) 準備タイム

「もしもタイム」に向けた準備時間として、参加者には限られたアイテムの中で、約 1 時間半をかけて寝床づくりや水の補給などの準備を行う時間を設けた。参加者は事前に学んだ知識やヒントを活用しながら、それぞれが生活しやすい環境を整えていた。あらかじめ電気と水が使用できなくなることを伝えていたため、参加者は「どのように備えるべきか」を自ら考えながら行動する様子が見られ、学びを行動に活かした時間となった。

準備の初期段階では、個人単位で寝床や道具の確保を優先する行動が多く見られたが、時間の経過とともに、グループ内で声を掛け合い、協力して準備を進める様子が増えていった。多くの参加者は最初に寝床づくりに取り組み、その後、明かりの確保や水の補給、着替えや机・物置などのプライベートスペースの整備へと移行していた。

なお、準備タイムにおいては、活動開始時の概要説明および安全面での配慮が必要な場面を除き、スタッフからの指示や助言はあえて行わなかったため、子供たちは主体的に考え、判断し、自主的に行動していた。

### (5) もしもタイム～もしも災害が起こったら～

参加者が災害時の状況を疑似的に体験し、実際に行動することを目的として、17 時から「水」と「電気」が使用できなくなる体験を実施した。参加者は、事前の準備時間に整えた場所や道具を活用して夕食づくりをした後、たき火、ナイトハイク、談笑など、自由に過ごした。

#### ①夜間

停電する 17 時には、夕食に向けた水の分配について話し合いを行っている最中で、突然の暗闇に戸惑いながらも、明かりを照らす役、水の使用量を把握する役、実際に分配する役など、自然と役割を分担して行動する様子が見られた。

暗闇や水の制限に対して当初は不安や戸惑いが見られたが、次第に星空やたき火の明るさに感動する様子や、暗闇の中で自然と近づいてコミュニケーションを取る姿が見られた。また、水の使用については、使いすぎる参加者は見られず、あらかじめ使用量を決めて慎重に行動する参加者もいた。就寝時には静かに過ごす様子が見られ、道具や環境が共有のものであるという意識が参加者に見られた。

就寝後には夜間の寒さで、深夜に目を覚ます参加者もいたが、「あと数時間をどのように過ごすか」「今の状況で暖を取る工夫はできないか」といった点について、自分たちで考え、話し合いながら対応しようとする姿勢が見られた。

#### ②早朝

起床後はラジオ体操を実施し、体を動かすことが被災者の活力につながることを学んだ。朝食は限られた非常食をグループごとに配付した。参加者は均等に分け合い、与えられた道具を活用し工夫して食事をしていた。

もしもタイム全体を通して、参加者の集団意識は徐々に高まり、不自由な環境下においても共助の姿勢が自然と見られるようになった。また、参加者主体の運営が、制限のある状況の中で自ら考え、判断し、行動する体験につながった。

## 事業1日目の様子



アイスブレイク



自衛隊講話



シチュエーション（水）



シチュエーション（電気）



シチュエーション  
（ダンボール）



準備タイム



もしもタイム



朝食（非常食）

## 【事業2日目】12月7日（日）

### （6）片付け

「もしもタイム」で使用した柔道場の片付けを実施した。起床後、片付けの指示を出す前から参加者が自主的に行動を始め、清掃などを進める様子が見られた。

床清掃や物品整理、トイレ掃除などの片付けは朝食時と同様のグループ単位で行い、役割分担は参加者同士の話し合いによって決定した。各グループでは主に5・6年生が中心となって進行していた。片付けの間は、楽しみながら取り組めるような声かけや雰囲気づくりが自然と生まれ、自身の役割を終えた参加者が他グループを手伝う姿も多く見られた。その結果、想定より約30分早く作業を終えることができた。

本活動は、「もしもタイム」を通して育まれた自主性や協力的な姿勢が、具体的な行動として表れた場面であったといえる。

### （7）災害ビーストバトルアタック

2日間の活動を通して得た学びを振り返る機会として、能美防災株式会社提供のカードゲーム「災害ビーストバトルアタック」を実施した。本ゲームは、地震や台風などの災害を想定し、備品カードを活用して身を守ることで、災害ごとに適した備えを考える内容となっている。

参加者はゲームを楽しみながら、自衛隊講話や「もしもタイム」での体験を振り返り、それらをヒントとして取り組む様子が見られた。また、災害の種類によって有効な備えが異なり、物資だけでなく考え方や心理的な備えも重要であることを、体験しながら学んだ。当初は3ゲームを予定していたが、理解が深まるにつれて意欲が高まり、グループによっては5回戦まで実施するなど、活動に熱中する姿が見られた。

### （8）炊き出し体験

自衛隊の協力により、ポークカレーの炊き出しを受けた。食事前には、炊事車の機能や災害現場における炊き出しの実情について説明を受けた。特に東日本大震災時に実際に配給活動を行った自衛隊員から当時の体験談を聞いたときには、参加者が真剣に耳を傾ける様子が見られた。

炊き出しの配給を受けた参加者は、約1日ぶりとなる温かい食事に感動している様子であり、食後には自衛隊員との会話や炊事車への乗車体験など、交流の時間も設けた。

本体験を通して参加者は、温かい食事のありがたさを実感し、避難所における炊き出しの役割や、日常生活における「食」の大切さについて改めて考える機会となった。

### （9）ドローン体験

日本DMC株式会社の協力により、災害時の活用を想定したドローン操縦体験を実施した。参加者はタブレット端末を用いて小型ドローン进行操作し、障害物を避けながら、被災者に見立てたマネキンのもとへ飛行させ、情報収集を行った。操縦時には、周囲の参加者が声を掛け合い、位置や方向を伝えるなど、協力して活動する様子が見られた。一方で、待ち時間には集中が途切れ、遊び始める参加者も一部見られ、運営面での課題を感じた。

終盤には屋外にてドローンによる飛行を見学した。参加者はドローンから見える景色に強い関心を示し、操縦画面に集まっていた。本体験を通して、災害時におけるドローンの役割や有効性について理解を深める機会となった。

## 事業2日目の様子



片付け



災害ビーストバトルアタック



炊き出し①



炊き出し②



ドローン体験



ドローンによる上空撮影

## 6.アンケート（事前・事後ともに回収率 100%）

### （1）事業に対する評価

Q このキャンプで楽しみにしていることは何ですか？（事前アンケート）

もしもタイムに関する記載	13 名（59%）
ドローン体験に関する記載	2 名（9%）
自衛隊に関する記載	1 名（5%）
その他	6 名（27%）

Q このキャンプで不安に感じていることは何ですか？（事前アンケート）

もしもタイムに関する記載	13 名（59%）
不安に感じていない旨の記載	5 名（23%）
参加者同士の交流についての記載	2 名（9%）
その他	2 名（9%）

Q この事業全体の満足度はいかがでしたか？（事後アンケート）

満足	やや満足	やや不満	不満
1 9 名（86%）	2 名（9%）	1 名（5%）	0 名（0%）

Q 思い出に残ったプログラムをすべて選んでください（複数可）

レクリエーション①（バースデーチェーン/拍手で集まれ）	15 名（68.1%）
レクリエーション②（シュウマイじゃんけん/中央セブン）	12 名（54.5%）
レクリエーション③（マシュマロリバー）	12 名（54.5%）
自衛隊のプログラム（堀班長のお話/シチュエーションゲーム）	17 名（77.2%）
もしもタイム	21 名（95.4%）
災害ビーストバトルアタック	17 名（77.2%）
ポークカレーの炊き出し	18 名（81.8%）
ドローン体験	18 名（81.8%）

その他の回答 ※一部

ナイトハイク（3 名）、たき火（2 名）、自衛隊とのおにごっこ（1 名）、そうじの時間（1 名）など

Q 心に残ったこと、楽しかったこと、大変だったことなど自由にたくさん書いてください。

(事後アンケート) ※一部

ダンボールベッドを作ることが大変。寒さに耐えることが大変。もしもタイムが終わってカレーを昼で食べたことでいつものごはんってこんなにおいしいんだと思った。
ドローン体験で、自分でドローンを操縦するのが楽しかった。停電して、真っ暗な夜はすごく寒くて大変だった。
もしもタイムはねどこや材料を集めるのが大変だった(作るのも)。災害ビーストバトルアタックはカードでゲームをして災害を防ぐのが楽しかった。
星がきれいでした。もしもタイムで電気がつかなくて、周りがよく見えなかった。ごはんを食べるのがたいへんだった。
大変だったことは、ねてるときに寒くてふとんのバサバサのおとがうるさかった。心に残ったことは、友達と協力しながら助け合うことが心に残った。楽しかったことは、友達とねながらしゃべったことが楽しかったです。
夜寝るときにさむかったから、温かくねれるのはしあわせだと思った。
夜が寒かった。ストーブやシートもなかったらもっと寒そう。バトルアタックはむずかしかった。何が必要かよく考えてからやるのが大切だった。ケガ多かった。ナイトハイクもたのしい。よるはあるかないから星いっぱい楽しかった!

(2) 防災意識に関する評価

Q これまでに大きな災害(地震・台風・停電など)を経験したことはありますか?(事前アンケート)

はい	いいえ	よく覚えていない
7名(32%)	11名(50%)	4名(18%)

Q 「口はい」と答えた方は、どんな災害でどんな経験をしましたか?(事前アンケート) ※一部

たつまきがおきて、ていでんをけいけんしました。
しょうがつこうの5時間目は台風で停電をけいけんした。
沖縄に行った時、50年に1度の大きな台風にあった。

Q 災害についてふだんどのくらい考えますか?

よく考える	時々考える	ほとんど考えない	全く考えない
2名(9%)	19名(86%)	1名(5%)	0名(0%)

Q このキャンプで「できるようになりたいこと」や「知りたいこと」を教えてください。(事前アンケート)

災害が起こった時の行動や考え方に関する記載	15名(68.1%)
非常食の調理や火おこしなど技能に関する記載	3名(13.6%)
その他	4名(18.1%)

Q 災害に備えるためにあなたができることは何ですか?(事後アンケート) ※一部

そのうちじゃなくて今、考える。いつどこでじしんがおきたらどうするか、家族で話す。防災グッズを買う。ローリングストック。
レトルトのカレーや、食材を買っておく。水をたくさん買う。電気をつかえなくなったら困るのでソーラーパネルなどを買う。
水をよういする。保存食を用意する。ガスコンロを準備する。寝袋を用意する。明かり(ライト)を準備しとく。
かい中でんとう、保ぞん水を分かるところにおいておく。
もしもの時のために水とかをしっかりとじゅんぴにとりくもうとおもった。



## Q もしも災害が起こったらあなたにできることは何ですか？（事後アンケート） ※一部

このキャンプで学んだことを生かしてねどこをつくったり、けいたいラジオなどでしょうほうを集める。
ランタンにふくろをかぶせてまわりをあかるくする。けがしている人のしょちをする。ダンボールベッドを作る。
共助、自助ができそう。助け合いは大切。災害用伝言ダイヤルは大体分かる。家に大きなひがいがなければ、ざいたくひなん。
ねどことかをつくったりして何日もはいるようなのをそなえたい。
もしも災害が起こっても、あわてず、れいせいに状況を判断して、ひなんじょに行ったり、行かなくても温かくねれる方法などをみんなに教えたりしたい。
できるだけひなんするときは体育館をさける。情報を手に入れる。

## 7.行動観察

### （1）概要

子供たち自身が「不自由な環境の中でどのように考え、どのように行動したか」を把握・記録するため、法人ボランティア6名に協力を依頼し、「もしもタイム」の準備段階から停電後、各自が生活の基盤を整えるまでの一連の場面における子供たちの行動観察を実施した。記録は、「誰が」「何をしたか」を中心とした簡単なメモ形式とし、随時記録を行った。また、行動観察にあたっては、「①自分で考えて行動する自助の姿」「②周囲と助け合う共助の行動」「③危険察知や優先順位付けなどの防災の視点」「④表情や態度などに見られる心理的な反応」の4つの観点を事前に共有したうえで記録を依頼した。

### （2）結果

#### 記録内容 ※一部

記載にあたっては、個人情報保護の観点から参加者名は記載しないこととする。

いつ	誰が	何をした
準備中	男子2名	2人で協力して段ボールベッドの作成をしていた。
	男子1名	銀マット→段ボール→毛布の順で敷く工夫をしていた。
	女子2名	明かりの確保のためにランタンの準備をしていた。
	男子1名	小物入れる用のケースを作成して、散らばらないようにしていた。
	女子グループ	ロープとODシートで着替え用カーテン（プライベートゾーン）を作成。
	男女	スタートと同時にみんなが好きなものを話し合いせずに持って行った。
	女子1名	自分の分だけでなく、人数分集めるために必要な量を計算して毛布を持ってきた。
	全員	開始直後一斉に銀マットへ →全員好きなものをもっていく。
	女子1名	「ガスコンロは他の人も使うかもしれないよ」といった。 →だれでも使える場所にコンロが移動していた。
	男子1名	銀シートなど数に限りがある物を確保して、周りにとられないようにしていた。
	男子1名	水の補給に気づきむかう。
	男子	初めは単独で動いていたが、徐々に話し合いする姿が見られた。
	女子グループ	余った乾電池1個を元の場所に戻そうとした。 →男子側と交渉して電池1個とアルミシートを交換した。 「ここでは電池1個はとても高級なんだよ」と言っていた。
	女子1名	何度か「女子で集まろう」とこえをかけていた（3回程度）。 →女子が複数人で集まって話す機会ができた。

	女子グループ	女子集合かけて会議→限られたものを工夫して分け使用する。
停電後	男子1名	全員に集合を呼びかけ、どうやって水を分けるかの議論をする。 それぞれの必要な水の量を聞き取り、名簿を作って可視化する。 再度呼びかけ、水汲みを開始→測りながらいれている。
	全員	スタッフより電池が新品ではない事実が発表→全員一度懐中電灯を消す。
	男子1名	水汲みをするとき、ほかのメンバーの邪魔をしてけんかになった。
	男子1名	大きい声でみんなに意見や考えを発していた。 →話し合いが個々から集団になっていった。
		話し合いが長くなると、話し合いから外れて遊びだしてしまっていた。
		ボランティアへ段ボールの譲渡（男子5～6名）。
		集合をかけて人数確認をする男子がいた。 女子はそれにアドバイス。みんなで水の分け方を考えていた。
		電気が消えてからは参加者が集まって話し合う姿が多く見られた。

### (3) 観察結果からの分析

行動観察を通して、不自由な環境下に置かれた参加者が、時間の経過とともに行動や意識を段階的に変化させていった。

「もしもタイム」準備の初期段階では、寝床や道具の確保など、個人の安全や快適さを優先する行動が多く見られた。これは災害発生直後における自然な反応であり、「自助」の視点が強く表れていた一方で、全体を把握しようとする動きは限定的であった。

その後、2～3人の少人数で協力しながら準備を進める様子が見られ、自助から共助へと行動が移行していく過程が確認できた。男女別の寝床という環境要因も影響し、男女分かれての行動が多く見られた。また、男子は個人または少人数での行動が多く、女子は少人数を基本としつつ全体でも話し合う場面が見られるなど、行動傾向に違いが見られた。

停電後の夕食時における水の分配では、全員が集まり話し合いを行い、先走って使用する行動は確認されなかった。これは、「限られた資源をどう使うか」という事前学習が参加者に定着していた結果と考えられる。また、一部の参加者が全員の使用する水量をまとめ、可視化して計算しており、防災的視点に基づく主体的な行動であった。

一方で、話し合いに参加せず単独で行動する参加者も一部見られたが、その際には周囲から声をかけ、協力を促す様子が見られた。不安や緊張を伴う環境下において行動の個人差は見られたものの、集団として課題を共有し、考え、判断し、協力しようとする姿勢が全体として多く見られた。

## 6. 成果と課題

### (1) 事業の企画・構成について

本事業は、「不自由な環境下において自ら考え、工夫しながら生活すること」および「災害を自分事として捉えること」を目的として企画・運営した。特に「準備タイム」から「もしもタイム」にかけてが参加者の主体性を最も引き出す時間となるよう、事前広報用チラシや配付資料、自衛隊による講話、シチュエーションゲームなどを通して、段階的な意識づけを行った。その結果、準備タイム開始後に環境や制限に対する不満は少なく、与えられた条件の中で工夫しようとする参加者の姿が多く見られた。

また、2日目以降は1日目を踏まえた行動の変化が顕著に見られた。特に朝食時には、限られた非常食を参加者自身がグループで相談し、役割分担を行いながら分配するなど、「自分たちが行動しなければ状況は改善しない」という意識が定着していた。その後の片付けや準備においても、スタッフの指示を待たずに気づいて動く場面が多く見られた。

これらのことから、「もしもタイム」において参加者主体で行動できる一定の自由度を確保したことが、自主性を育む成果につながったと考えられる。

一方で、「ドローン体験」では、待ち時間に集中力を欠き、遊び始める参加者が一部見られた。参加人数の増加に対する事前想定不足や、機体トラブルによる中断、プログラム全体の流れの中で位置づけが弱く事業の構成上やや孤立した内容となってしまった点が要因として挙げられる。今後は、講師との事前打ち合わせをより綿密に行い、待ち時間や役割設定を含めたプログラム構成の見直しが必要である。

## (2) 事業広報について

昨年度は、広報開始時期の遅れにより参加者が集まらないといった課題があった。今年度はその反省を踏まえ、早くから広報を開始したことで、参加者が多く集まった。

また、チラシのデザインについても、参加者の興味・関心を引く構成や表現を意識して作製した結果、参加者だけでなく保護者からも評判が良かった。

本事業は災害をテーマとしており、不便さや過酷さを伴う内容であることから、参加への心理的ハードルが高くなりやすい。そのため、事業のねらいや魅力が伝わるよう、早期からの広報展開やチラシの工夫は、今後も継続して取り組んでいきたい。

## (3) 行動観察について

今回、新たな試みとして法人ボランティアによる行動観察を導入した。導入にあたっては、観察に集中することで子どもへの関わりが疎かになることを懸念し、事前に記録用紙の様式や記入方法、観察時のポイントについて打合せを行い、共通理解を図った。

その結果、参加者一人ひとりの行動や反応を記録として残すことができ、担当職員のみでは把握しきれない細かな変化や場면을捉えることができた。不自由な環境下における判断や行動、他者との関わり方について客観的な記録を得られた点は、事業の振り返りや評価において有効であった。

一方で、ボランティアからは、行動観察と子どもへの直接的な関わりとの両立に難しさを感じる意見があった。今後は、活動場面ごとに行動観察と子供との関わりをボランティアごとに明確に設定し、ボランティアが自身の役割に集中できる体制を整える必要があると考えられる。